

研究発表もうしこみフォーム

氏名：富田 敬大

氏名のローマ字表記：Takahiro TOMITA

所属：立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構

専門分野：文化人類学

発表のタイトル：社会主義期のモンゴル国北部における畜産業化の展開とその影響：乳・乳製品の生産を中心に

発表要旨（600字～800字程度）：

本発表では、社会主義時代のモンゴル人民共和国（以後、モンゴル国と略す）において進められた牧畜の産業化が、地方の家畜飼育・畜産物利用にどのような影響を及ぼしたのかを、乳・乳製品の生産に着目して明らかにすることを目的とする。

第二次世界大戦以後、モンゴル国では、旧ソ連および他の社会主義諸国に対する食品・工業原料としての畜産物の輸出が拡大した。さらに、国内でも、都市のインフラ整備や工業化が進み、都市人口が増加したことにより、肉や乳製品などの食料需要が急速に高まった。地方では、1950年代末以降、農牧業協同組合（ネグデル）が、バターを始めとする域外向けの乳製品の生産をになうようになった。調査地のモンゴル国北部・ボルガン県の農牧業協同組合では、当初、原料となる牛乳（またはツツギーとよばれた半完成品）の供給が主であったが、1970年代初頭前後を境として、ウシの飼育および搾乳、乳の集荷、加工までを一括して行うようになった。こうしたなか、ソ連製の機械を用いたバターやカゼインなど外来の乳製品製造法が普及するとともに、これらの作業を分担して行うための組織づくりとより効率的な生産システムの構築が段階的に進められていった。一方で、地域や家庭内で消費される伝統的な乳製品の生産も続けられ、両者を併存させるための固有の論理（家畜種や季節、家畜の所有関係に応じた乳・乳製品の使い分け）が働いていたことが分かった。

本発表では、農牧業協同組合による乳・乳製品の生産をめぐる域外流通と域内消費の関係を中心に、その変遷と地域的な偏差について検討を行う。国内外の都市消費者向けの商品であると同時に、家庭内での自足的な消費の対象でもあった乳製品に着目することによって、社会主義下の牧畜の産業化の実態とその特徴について考えてみたい。